

子どもの造形の領域とその指導 (二)

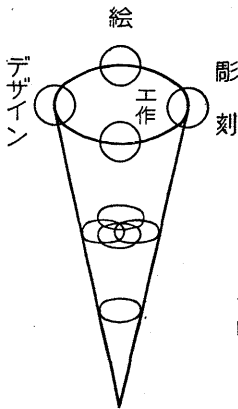


四、四つの領域のかみ合い

十一号では子どもの造形領域を今までのような絵画・製作という表現形式を中心にしたタテの分け方だけでなく、むしろ内容を中心としたヨコの分け方(感情の表現と機能の表現)を大きくとり入れてみると、大体四つの領域(絵・彫刻・デザイン・工作)に分けられるということ。しかし、幼児の場合は、そのお互のかみ合う帯のひろさがたいへん広いものである。ということについて述べてきた。つまり幼児の場合、絵ともつかず、もようともつかぬどちらともいえるような作品がたいへん多く、同様に絵と彫刻、あるいは彫刻と工作といった関係でもいえることである。このことはむしろ幼児の造形の大きな特色であって、指導としてはこのように四つの領

域に分けて指導するというのではなく、あくまでこのようなことは教師の頭の中にあればよいことで、幼児の造形をみる場合、どのような発想でおこなわれていくかを見分けるメガネの用を果たせばよいということである。

四つの領域の大小なかみあいは、相当だいな問題で、決して平面的な図だけでは表わしきれない。



いかなれば上の図のように、ちょうど円錐を逆さまにしたようなことになるのではなからうか。

逆円錐の上すなわち

林 健 造

おとなの世界では分化されている領域でも下の方になればなるほど分化されない形、ただしそれぞれの領域の萌芽をはらんでいる状態、これが幼児の造形であろうと思われる。

しかし考え方としては、一応四つの領域に分けて考えた方が解りやすいのでその立場から話をすすめていこう。

五、絵や彫塑（心象表現群）のねらい

絵でも、彫塑でも、表現材料が違うという差はあっても心象とか心の感動とかを中心に表現する意味では同じである。ここでは、幼児が何に感動するか、どう感動したかが問題になろう。この関係は別々のものではなく、密接な関係にあるものであるが、前者は題材につながるであろうし、後者は幼児の表現から知ることができる。

つまり幼児に皿の上のせた果物や野菜をかかせたり、酒びんをかかせたりする絵をこの頃でもよく見かける。なるほど創造的な表現をさせるためには、ものをみつめさせる教育は必要であることは一応理論として認めてもよいが、幼児が大根にそれ程感動するとは思われない。幼児の感動と無関係のものをかかせようとすることはおとなの絵をかかせるための技術主義に外ならない。一般的に幼児はやはり静的なものよりも動的なものを好むのが普通であり、そのような元気な子どもの方が幼児としてのもぞましい。したがって幼児が何に感動するかは大事な問題であるわけである。

もし、ごく自然の姿で幼児が絵をかいたり、粘土でものを作ったりする場合、その心とか感動とかが、卒直に表現に表われるものである。嬉しければ嬉しさが躍動的に、腹立たしければ乱暴な表現で。したがって逆に子どもの表現という窓口から子どもの心をぞくことができるわけで、絵や粘土表現を通して、子どもの心を発見し、これをガイダンスに活用という方法が、造形教育の新らしい分野として利用されたのはこの意味である。

ともあれ、そのように感動が卒直に、いきいきと表現されているとか、ぼんやり何を表現しても、一つの型にはまったような表現しできないかでは、のぞましい幼児という尺度からはだいたい問題になろう。おかあさんを描いても、三本まつげのお人形さんをかくとすれば、母親に対する認識や感動のあり方がそんなに漠としたものであることに問題があるということになろう。

いったい子どもに絵をかかせるということはどんな意味をもつのであろうか。どうしても絵でなければ養えないものは何かを考えてみると次の三つのことのように思われる。

1. 創造的な表現が自由にできる。
2. 空間関係を学ぶことができる。
3. ものの認識を確かにする。

このことについてくわしく述べるよゆうはないが、言語や文章表現のじゅうぶんでない幼児にとって絵をかくことを通して自分の見

たこと、感じたこと、想像したことを自由にかくことは容易である。絵という色や形の具象化により、創造的な力がのびていくことは当然考えられる。しかも、野球場という広い場面でも、運動会で皆が輪になってお遊戯をしたという複雑な関係でも、さては遠い大昔のことでも、いわば時空間にわたって、それを一枚の画用紙に表現できるということはやはり絵の大きな特色であって、しかもこの中でもその空間関係を自分なりに確めているといえよう。次に描くことによって覚えるということも事実で、描くことを通してものの認識を深めていくという作用がある。ソ連の教育で絵を認識過程の手段として重視しているのもそのためであろう。

六、デザインと工作（機能表現群）のねらい

最近デザインということばがたいへん使われている。改訂指導要領の小・中学校の指導内容にもデザインという柱がとり入れられ、図画と工作との韌帯（きんたい）として重視されている。

一応デザインということについて概念的に述べてみると、ものが作られるということは、次のような過程を通る。

発想—計画—製作—仕上げ—完成

このような全体の造形計画を普通デザインといっている。

デザインというと何かドレスを作るといような狭い意味にとられたりするが、われわれの日常生活と密接なしかも身近な関係をも

つもので、例えば一枚の葉書をかくにしても、よみやすく、用件がわかりやすく、ここには何をかくとどのように計画がなされるし、日本の庭園のとび石などは、歩巾（しん）とか足ののる安定性とか色や形と全体との釣合などを考慮した計画がなされているわけでこれらは暮らしの中のデザインである。一枚で何の用もかねられる風呂敷などはその意味からすばらしいパッケージ（包装）デザインといえよう。

ところで従来は図案ということばを使ってきたがこの両者の区分は、もともと同じ意味で発生したものであるが、図案がもの表面のもようといった狭い範囲にとどまっていたるうちにデザインの方は東京タワーのような建築や工芸はいうにおよばず、さては都市計画までを含む広汎な世界に発展してきて、その差はますます大きくなってわけである。

一口にいえば婦人が口紅や眉墨をぬって美しくしようとするのはいわば図案であることに對し、じゅうぶんな栄養と睡眠としかも適度のスポーツを通して身心ともに美しくなるやり方はつまりデザインであるといえるかもしれない。

もちろん、絵や彫刻にも計画がある。しかし慣習上ここではフランス語のデッサンということばを使っている。

ところで子どもとデザインの関係であるが、子どもの造形生活の中にも、役に立つという機能を重視することの必要な多くの場がある。しかし、小学校では一年生や二年生頃にデザインといってもせ

いぜい模様作り程度であるから、三年生からデザインという用語を用いることになっている。

もちろん模様というものは、美しく、みていて気持ちのよいようにしかも一定の秩序をもっているものであるから、デザインの要素的なものをもっている点で一つのデザインであろう。しかし、デザインは模様であると考えてはいけないことは前述の通りである。

さて幼児とデザインの関係はどうだろう。幼児のデザインなどという専門のデザイナーはふき出すかもしれない。多くの人たちもそれはほとんど結びつきがないものと思うかもしれない。

しかし、子どもの教育の中でデザインを考えていこうということ、しかもと専門家が考えているようなデザインではない。いわばデザインの芽ともいうべき、デザインの発想を重視することであり、ものの機能を考えてものごとを計画的に処理していこうという態度を育てていこうとすることにある。

人間は生まれながらにして裝飾本能をもっていると考えられるし、幼児が石や花を並べていたり、ものを飾りたいと思うことは否めない。したがって当然模様ということも考えられる。私がいいたいのは、模様だけではなく、もっと機能的なデザインの萌芽もあるということなのである。

例えば、ままごと遊びで、粘土で作ったごちそうを木の葉にのせしもつてくる。と途中でころがりおちる。そこでこんどは粘土を鉢

のようにおちないことを考えるというのは幼児の機能的なデザインではなかるうか。

積木遊びをするときでも、積木を自動車だとしてブービーとおしていくが、走らないので積木の丸棒をコロに入れることを考えてこんどは走るよというときには、デザインの発想としてすばらしいものではないだろうか。

それから、画用紙に大きな木を一本だけかいた子どもがいる。絵としてはのぞましいとはいえない。なぜならば、もつと子どもらしいいきいきしたモチーフで、しかも内容が豊かである方がのぞましいからである。ところでその子ができ上がったときに、このところの窓をそつと開けると、ほら中に小鳥さんたちがすんでいるでしょうと眼を輝やかして話してくれた。なるほどこれは木の幹の一部に切りこみを入れて、うらからもう一枚紙をあてて、窓をひらくと中に何かいるということを考えていたわけである。

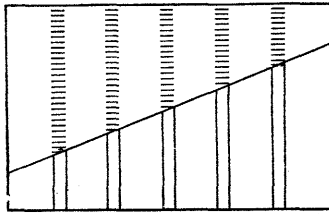
この子のような場合、絵画一辺倒の見方では、一がいにのぞましくないところはあるは捨てられたかもしれない。しかし、この発想はすばらしいものだというデザインの眼鏡を通してみてやることによつてこの子をみとめてやることのできるのではないだろうか。ここに教師がデザインの眼鏡をもっているということの必要性がある。

幼児の場合、単なる模様作りということだけでなく、以上のよう

あるからそのような大事な芽を見落とすことなく育てていくことが大切であるということである。

もちろん幼児にデザインなどということばを知らせる必要はない。笑い話だが、全国デザイン展の応募作品にのれんというのがある。ここに幼児のえがのれんにされたものが数枚でていた。いずれも、デザインとかわいらしい字でかいてあったが、審査員の連中と、幼児の場合はデザインでなくてデザインかねと笑ったことがあった。

製作というか、工作の面でも従来は、教師がある方法を示して、その通りに作らせるという形の教育が多かった。絵の方では、今頃臨画をするといったら多くの人は笑うであろうが、製作の方では案外、教師の作ったものをそっくり作るとか、その発想も教師の発想であるといった臨デザインや臨製作のものが平気でおこなわれているのではないだろうか。



註

□ は個性的な、自由な、解放的な活動
▨ は条件的合理的な活動

もっと子ども自身の発想で、子ども自身の作り方というものが新らしい製作のねらいであろう。

いずれにせよ以上の絵・彫塑・デザイン・製作という四つの領域でする造形活動が子どものレディネスにあわせてどのように案配されていけばよいであろうか。上の図はそれを示したものである。

製作の場合も、上の図でみるように、やさしいものから難かしいものへ、単純から複雑、材料抵抗のないものから、抵抗を克服していく喜びへとといった配列が考えられるであろう。

以上造形教育の領域とその指導について述べてきた。このような考え方は教師の頭の中に構造体として把握しておくことが都合がよいと思われるので四つの領域に分けて話してきたが、幼児の場合でも、絵画だけの教育では育つべき多くの大切な芽が育たないことがあると思うのでつとめて造形教育という広い活動領域から教育していくことがぞましいと思う。

わが国の美術教育の歴史は、従来も絵の教育に重点があったようである、しかも多くは専門画家の手によったり、あるいはそのやり方をうのみに教育の場にとり入れてきたことが多かった。これからの教育は、本当に子どもをよく知っている、現場の教師中心におきかえられるものでなければならぬ。いわば造形教育の歴史は、画家の手から子どもを教師の手に戻そうとした歴史といっても過言ではなからうと思う。

その意味で、子どもと毎日とくりくんでいる現場の教師こそ最もぞましい造形教育の指導者であるといいたい。